

霧積ダム (霧積湖) きりづみだむ (きりづみこ)

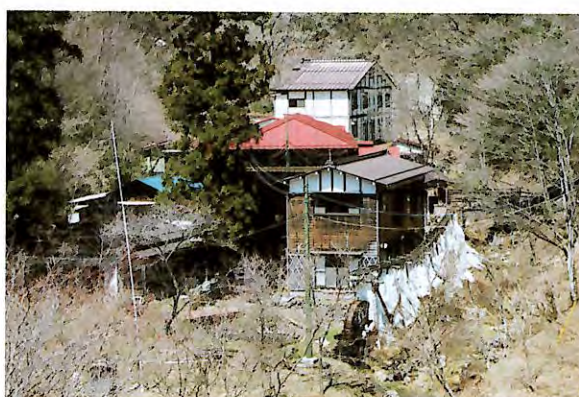


霧積ダム堤体

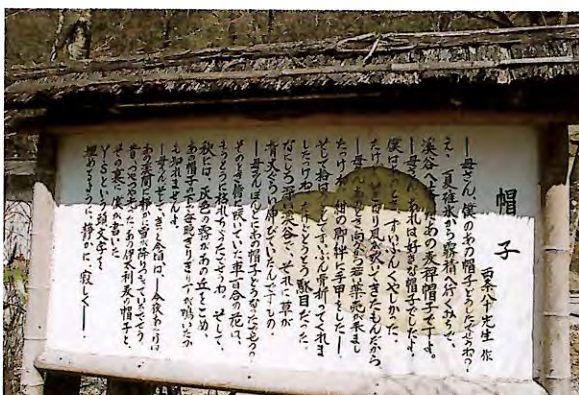
関連DATA



湖側から堤体を見る



霧積温泉



西条八十「帽子」

長野県との県境にある鼻曲山(1655m)に源を発する霧積川の中流に位置する霧積ダムは、昭和22年(1947)のカスリン台風、翌23年(1948)のアイオン台風、そして24年(1949)のキティー台風などで被った甚大な被害を教訓として建設されたダムです。

昭和45年(1970)に群馬県により着工され、昭和51年(1976)に完成しました。霧積川が合流する碓氷川流域は、洪水により被災する危険性が高かったのですが、人口が密集し、堤防の改修が困難だったことから上流域の霧積川にダムを建設する計画が採用されました。霧積ダムは、洪水時に河川流量を調節するとともに、水道用水や流域の良好な河川環境を維持するための不特定用水を確保する多目的ダムとして誕生しました。

霧積ダムは、群馬・長野・新潟の三県に跨ぐ美しい山岳と高原を中心とする広大な自然公園「上信越高原国立公園」に接しており、霧積川の約4km上流には秘湯「霧積温泉」があります。霧積温泉は古くは「入りの湯」と呼ばれ、明治17年(1884)に旅館が開業したと伝えられています。後年、推理小説「人間の証明」で一躍有名になったことでも知られています。霧積ダムの近傍には軽井沢、浅間山などの観光地があり、また霧積川はヤマメなどの釣り場として東京方面からの釣り客で賑わっています。霧積ダムの上流では、長野新幹線の一ノ瀬トンネルと碓氷峠トンネルの僅かな区間に新幹線の車両が地上に顔を出すことから貴重なシャッターポイントとして鉄道ファンの人気を集めています。

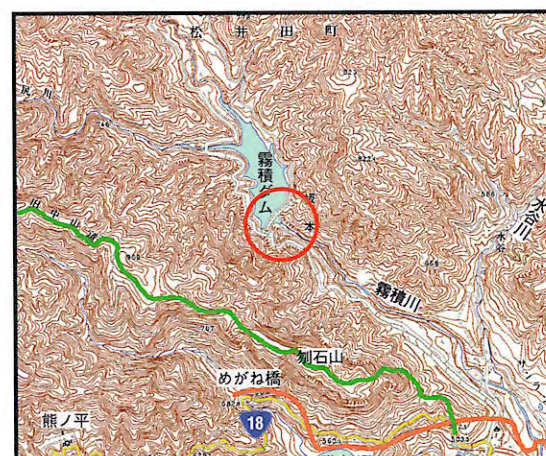
奥深い山里に静かに佇む霧積ダムは、その名前のように時折、深い霧がダムと湖面を包み込むように発生し、神秘的な雰囲気を出しています。

概要

- 所在地 碓氷郡松井田町坂本
- 河川名 霧積川
- 年代 昭和51年(1976)
- 構造形式 重力式コンクリートダム
- 主要諸元 堤長305.0m 堤高59.0m
総貯水容量2,500千m³
- 管理者 群馬県



霧積ダムを堤体下より見る



(縮尺 1/50,000)

下久保ダム (神流湖) しもくぼだむ (かんなこ)



深い山間に城壁のように立つ下久保ダム

概要

- 所在地 多野郡鬼石町保美濃山～埼玉県神泉村
- 河川名 神流川
- 年代 昭和44年(1969)
- 構造形式 重力式コンクリートダム
- 主要諸元 堤長605m 堤高129m～73m
総貯水容量130,000千m³
- 管理者 (独)水資源機構(旧水資源開発公団)



(縮尺 1/50,000)

関連DATA



施工中の下久保ダム(昭和42年(1967))



下久保ダムの取水施設



静かな湖面に遠く金比羅橋が見える



ヤマセミ



三波石峡

下久保ダムは、多野郡鬼石町と埼玉県神泉町との県境に位置し、深い山間にまるで城壁のように高くそびえ立っています。重力式コンクリートダムとしては日本一の堤長605mを誇る巨大なダムです。

昭和22年(1947)のカスリン台風、翌23年(1948)のアイオン台風など連続した記録的な豪雨により、利根川水系の各都県では甚大な被害を受けました。そのため治水について総合的な対策が急務となりました。一方、東京都、埼玉県を始めとする首都圏では人口の増加が著しく、上水道用水の確保、工業団地の造成に伴う工業用水の確保、さらにダム下流域の営農のための農業用水の確保など、飛躍的に増大する水需要に対応した抜本的な水需要対策が求められていました。これらの要請に対し、国や旧水資源開発公団(現(独)水資源機構)では治水、利水の両面から利根川上流域に下久保ダム、藤原ダム、矢木沢ダムなどを相次いで建設してきました。

下久保ダムは、着工以来9年間の歳月をかけて利根川水系神流川に建設された大規模な多目的ダムで、世界的にも珍しい直線L字型の形状をしたダムであり、見る位置によって様々な表情を見せてくれます。

ダムが生み出した利水用水は、東京都と埼玉県に水道用水として、また埼玉県には工業用水の外にダム下流域の灌漑用水などを補給しています。さらに群馬県企業局では放流される水を利用して、下久保ダム発電所で最大15,000kw、下久保第二発電所で270kwの発電をしています。

下久保ダム発電所は、地下約60mに設置した水車発電機により発電する地下式の発電所です。しかし、ダム建設以降は全ての水が地下水路を通じて発電に利用されるため、ダムの放流時以外はダム直下から約3.8kmの区間(減水区間)に殆ど水が流れない状態になっていました。このため国土交通省と群馬県企業局は共同事業で、下久保発電所の水圧鉄管から分岐する鉄管を設置し、この管路から水を利用して下久保第二発電所で発電した後にダム下流に直接放流することにより減水区間を解消し、河川の環境や景観の向上を図っています。維持流量の放流が実現したことにより清流が復活し、下久保ダムの直下流の国指定天然記念物・三波石峡の美観が守られ、ヤマセミの生息地としても知られるようになりました。

三つの取水ダムを持ち、下流を洪水から守る道平川ダム

道平川ダム (荒船湖) どうだいらがわだむ (あらふねこ)



霧にけむる荒船湖

概要

- 所在地 甘楽郡下仁田町南野牧
- 河川名 道平川、相沢川、市野萱川、屋敷川
- 年代 平成7年度(1995)
- 構造形式 重力式コンクリートダム
- 主要諸元 堤長300.0m 堤高70.0m
総貯水容量5,100千m³
- 管理者 群馬県



(縮尺 1/50,000)

関連DATA



道平川ダム堤体



市野萱取水ダム



相沢導水トンネル放流口



親水公園は市民の憩いの場として人気が高い

下仁田町は深い山間を流れる鏡川の上流域に広がる町です。過去、台風や集中豪雨時には、激しい流れと多くの支流からの土石流で深刻な土砂災害が発生したこともありました。

町の北西部に建設された道平川ダムは、このような災害を未然に防止するために建設されたダムで、平成7年(1995)に群馬県により建設されました。ダムの主な目的は、洪水の調節と上水道用水の確保で、下仁田町を始めとして富岡市、甘楽町、吉井町の水道用水を供給しています。このダムの特徴は、なんと言ってもダム本体の他に3基の取水ダムを有することです。必要とされる利水量を確保するためには、道平川だけの流水では不足することから隣接する屋敷川、市野萱川、相沢川に取水ダムを設置し、取水した水を導水トンネルと水路橋で本体ダムである道平川ダムのダム湖(荒船湖)へと集めています。この結果、流域面積は合計27.6km²にもなります。一つのダムに3つの取水ダムを有するダムは全国的にも例がありません。また、道平川ダムは関東地方で一番早くRCD工法(Roller Compacted Dam-concrete method)と呼ばれる最新工法で施工されたダムとして知られています。RCD工法は超固練りのコンクリートを重機で敷きならし、ローラーで転圧・締め固める施工法で、従来の施工法と比較するとコンクリートの発熱が少なく、機械的・合理的に施工が行えるなどの優れた特徴があります。

ダムの建設に伴い生まれた荒船湖の上流域には、湖畔を半周するように荒船湖農村公園が設置され、大型遊具や野外でバーベキューを楽しむ多くの人々が見られます。下流域には親水公園が整備され、水際に降りてヤマメやイワナを釣る太公望の人気のスポットでもあります。

橋倉川堰堤 はしくらがわえんてい



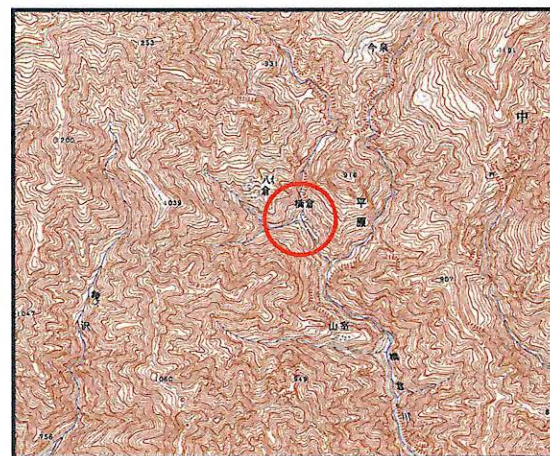
奥多野の山あいの集落を流れる神流川には数多くの支流があります。橋倉川も神流川の支流の一つで、御荷鉾山系の懐深く日陰山と日向山の谷間に源を発し、神流町に隣接する上野村との行政界の近くで神流川に合流します。狭い谷間に沿って流れる溪流に設けられた堰堤を訪れる人は少なく、わずかにハイカーが林道七久保・橋倉線^{ななひやくほ}を辿って名滝・小豆の滝^{あずき}を訪れるばかりです。橋倉川堰堤は、山から流れ出す土石を堰き止め、下流の集落を土砂災害から守る大きな役目を黙々と果たしています。



落差35m、二段構えの小豆の滝

概要

- 所在地 多野郡神流町平原
- 河川名 橋倉川
- 年代 昭和48年(1973)
- 構造形式 コンクリートアーチ堰堤
- 主要諸元 堤長56.2m 堤高20.0m
- 管理者 群馬県



(縮尺 1/50,000)

住居附沢川堰堤 すまいづくさわがわえんてい



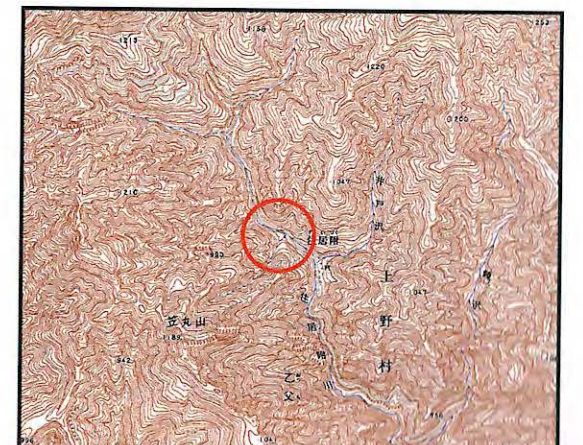
住居附沢川は上野村の豊かな森林の間を流れる小さな溪流で、上野村乙母地内で神流川に合流します。住居附沢川堰堤付近には、大きな岩が転がり、兩岸の岩肌は荒々しくゴツゴツとしています。荒削りの石を積み上げ建設された石積堰堤は非常に堅固に造られ、当時の石積技術の高さを示しています。堰堤は建設以来一度も補修することなく、今でも豪雨時の土石流をしっかりと受け止めています。川沿いの笠丸山やその周辺では4月下旬から5月上旬にかけて咲くアカヤシオの群落が見事であり、訪れる人を楽しませてくれます。



中ノ沢林道から見る満開のアカヤシオ

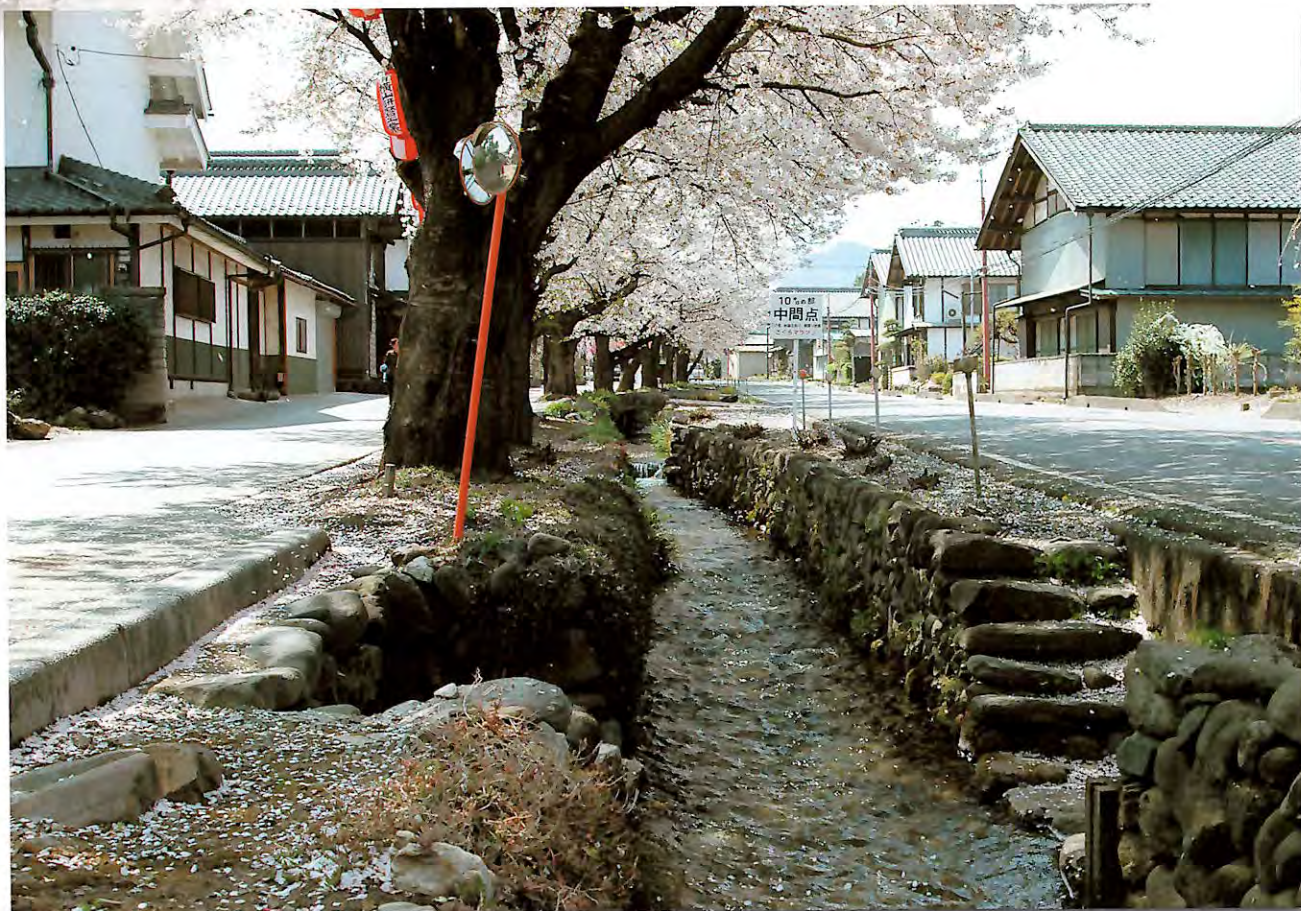
概要

- 所在地 多野郡上野村乙父
- 河川名 住居附沢川
- 年代 昭和16年(1950)
- 構造形式 石積み堰堤
- 主要諸元 堤長41.0m 堤高8.0m
- 管理者 群馬県



(縮尺 1/50,000)

小幡宿 (雄川堰) おばたじゅく (おがわぜき)



関連DATA



慶応元年 (1865) 7ヶ月と250人の手間で築いた「吹上げの石樋」



旧陣屋の中小路に面して造られた「喰い違い郭」



江戸時代の面影を残す武家屋敷



大正時代の倉庫を改築した甘楽町歴史民俗資料館

甘楽町の小幡地区には、いくつもの武家屋敷が残り、小さいながらも江戸時代の趣を今に残す城下町として知られています。町の中心部には見事な桜並木に沿って日本名水百選に選ばれた雄川堰が流れ、美しい景観を形成しています。

大字名の「小幡」は、平安時代末期から当地に城を構えた城主・小幡氏に由来します。戦国時代、城主・小幡信定は武田軍に属し、赤装束の騎馬軍団として活躍し、「上州の赤備」と呼ばれ武田騎馬隊の中核として勇名をはせました。

その後、元和元年 (1615) に織田信長の二男信雄が小幡二万石に封ぜられ、織田家による本格的な小幡藩政が始まりました。信雄は小幡の立地条件の良いことに着目し、家臣の屋敷を中心に陣屋づくりに着手し、寛永19年 (1642) 頃にほぼ完成したと伝えられています。現在残っている町並みや遺構はほとんどがこの時期以降のものであります。

小幡の街づくりは大きく分けると武家屋敷地区と町屋地区に分かれ、前者には藩邸、武家屋敷、庭園などがあり、「旧小幡藩武家屋敷松浦氏屋敷」の名称で平成9年 (1997) に県史跡にも指定されています。また大名庭園の姿を今に残す楽山園は、小幡藩邸跡地とともに平成12年 (2000) に国の名勝に指定されました。町屋地区は、武家屋敷地区の北にある大手門跡を境として北側に約600m、東側に約200mにわたって広がっています。

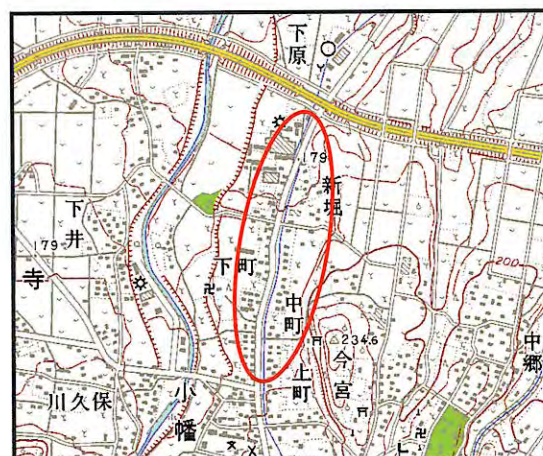
小幡地区の中心には雄川から取水した雄川堰が流れ、そこから小堰が網の目のように街中に張り巡らされ、各民家の前には洗い場が設けられています。小幡の町並みの最大の特徴は、建物が堰から取水しやすいように一定のルールを保って区割りされていることで、結果として町全体が調和のある景観美を形成しています。当時は灌漑用水や生活用水のほとんどを雄川堰の水に頼っており、その保全には専門の奉行職が置かれるなど細心の注意が払われていました。寛永19年 (1642) に建造された雄川からの取水口である一番口や、慶応元年 (1865) に建造された「吹き上げの石樋」などは今でも現存し、当時の土木技術の高さを伝えています。

概要

- 所在地 甘楽郡甘楽町小幡
- 年代 寛永19年 (1642)
- 構造形式 街並
- 管理者 甘楽町ほか



小幡さくら祭り武者行列



(縮尺 1/25,000)

高崎市の水道 たかさきのすいどう



提供：上毛新聞社

概要

- 所在地 高崎市剣崎町・若田町
- 年代 明治43年(1910)・昭和39年(1964)
- 構造形式 ろ過池・浄水池
- 主要諸元 給水能力：剣崎浄水場 5,500m³/日
若田浄水場 35,000m³/日
緩速ろ過方式、水源：烏川表流水
- 管理者 高崎市



創設時、神山取水口にあった三角ノッチ



(縮尺 1/25,000)

関連DATA



創設時剣崎浄水場配水池築造工事



烏川神山取水口



水道記念館。玄関右脇は創設当初のベンチュリーメーター室



当時の剣崎浄水場配水池内部

群馬県内で最初に上水道が敷設されたのは高崎で、明治43年(1910)のことでした。これは全国でも20番目という早い時期にあたります。水道用水は烏川の表流水を榛名町上里見の神山取水口(春日堰)で取水し、延長6.5kmの導水管で剣崎浄水場に運んでいます。建設当時の施設は、高崎市の人口35,000人に対し50,000人分の給水能力を有しており、高崎市の将来の発展を見据えた計画でありました。その後、数次にわたる拡張工事が行われるとともに、昭和39年(1964)隣接地に若田浄水場が完成しました。現在の施設は剣崎浄水場が約5,500m³、若田浄水場が約35,000m³の供給能力を有する市内最大規模の浄水場になっています。

この2つの浄水場の最大の特徴は、自然流下方式という非常にシンプルで経済的なシステムを用いていることです。自然流下方式とは、地形の高低差を巧みに利用することにより水道水を配水するシステムで、ポンプを利用しないため動力費が安価になり、水道水の生産コストが低く抑えられる特徴があります。

また、取水した水を緩速ろ過方式で浄水とする方法が採用されているのも大きな特徴の一つです。緩速ろ過方式は可能な限り薬品を使わず、微生物などの働きを利用してゆっくりと原水をろ過する方式で、若田浄水場では約20時間をかけています。緩速ろ過方式の浄水場は、上水道施設が整備され始めた初期の頃に多く造られましたが、戦後は薬品処理により短い時間で浄水処理する急速ろ過方式に取って代わられました。その後、緩速ろ過方式は経済性などの面から忘れられていましたが、近年、人々の健康への意識が高まるとともに安全で良質の水を得る事ができる方式として、世界的に再評価されつつあります。若田浄水場の敷地内には、平成3年に高崎市水道記念館が開館しました。記念館には浄水場建設当時、原水取り込み量を計測するために使用されたレンガ造りの三角ノッチや浄水の配水量を計測するベンチュリーメーター室など多くの遺構や資料が移設展示されています。

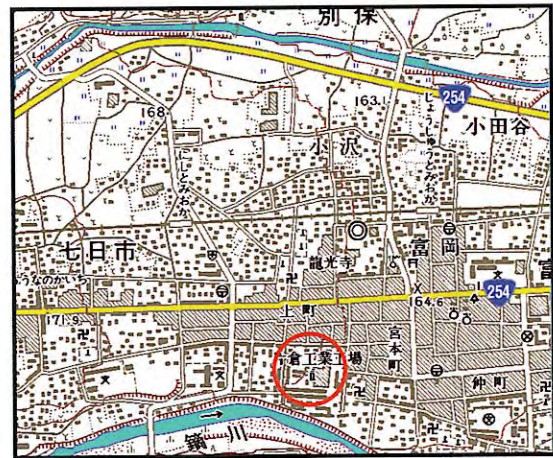
石造り下水溝 (旧官営富岡製糸場) いしづくりげすいこう (きゅうかんえいとみおかせいしじょう)



正面ゲートから東蔵倉庫正面

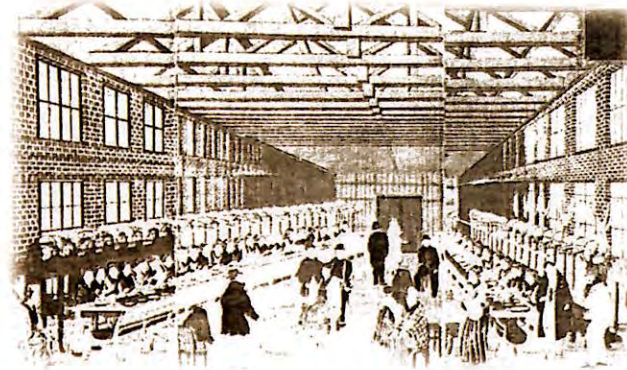
概要

- 所在地 富岡市富岡
- 年代 明治5年(1872)
- 構造形式 石積下水溝
- 主要諸元 延長約180m 幅約60cm 高さ約1m
- 管理者 片倉工業(株)



(縮尺 1/25,000)

関連DATA



往時の工場風景を描いた浮世絵



玄関口に遺される「明治五年」の表記版



和洋折衷方式の木骨レンガ造倉庫



錫川から見る富岡製糸工場

旧富岡製糸工場は、明治5年(1872)に明治維新政府の殖産興業政策の一環として建造された官営の模範製糸工場です。この生糸生産工場には、我が国初の工場用蒸気エンジンを使用した最新式の製糸機械が設備されるなど、当時としては極めて近代的な工場でした。工場の建物や機械はフランス人技術者ポール・ブリューナー氏の指導のもとに日本人技術者たちの努力により完成しました。

5万m²の広大な土地に残る主要な建物は、繭倉庫2棟、繰糸工場、首長館、事務室などで、整然と建つ赤レンガづくりの建物は明治時代の面影を今に伝えています。優れた設計と施工による建築物とともに、引水溝、下水溝、井戸、鉄水槽等の施設も比較的良好な状態で現存しています。

石造り下水溝は、旧富岡製糸工場施設の一環として、繰糸場外北側に地下埋設されたもので、幅約60センチ、高さ約1メートル、長さ約180メートルの下水溝です。天井部をアーチ状にした本格的レンガ造りで、排水が製糸場外側に流れる錫川に落ちるように設計されています。ポール・ブリューナーはパリの下水道に倣って、悪臭を放つ製糸場の汚水処理に地下埋設式の下水溝を採用したものです。

これらの貴重な施設については平成17年(2005)7月14日に国の史跡指定を受けましたが、さらに、この貴重な遺構を世界遺産として登録しようとする活動が、群馬県・富岡市を始めとして多くの市民の間に広がっています。

妙義神社の石積 みょうぎじんじャのいしづみ



「大文字」が浮かぶ表妙義山

関連DATA



黒漆塗銅葺入母屋造りの本殿（重要文化財）



重厚な彫刻物を配する唐門（重要文化財）



日光東照宮と同じ彫刻師が彫り上げた「竹林の七賢人」

白雲山の東の麓、静寂な木立の中にたたずむ妙義神社が創建されたのは、今から約1500年前、宣化天皇2年（537）のことと伝えられています。妙義神社は、元々「波己曾神」を祀る神社であったことから「波己曾神社」と言われていましたが、江戸時代初期から「妙義神社」と呼ばれるようになりました。祭神は日本武尊、菅原道真、権大納言藤原長親卿などですが、古くより一般庶民だけでなく公家や武士の信仰を集める格式の高い神社として知られていました。

現存する建造物は宝暦2年（1752）に徳川将軍家によって大改築されたもので、将軍家の手厚い庇護があったことがうかがえます。現在、その多くの建築物が国の重要文化財に指定されています。

妙義神社の石垣は、この急峻な傾斜地に建物を安全に建築するために、斜面の崩壊を防ぎ、安定した堅固な地盤に建築物を建設する必要から、妙義山麓で産出する安山岩が用いられています。これらの石垣から、当時の石材加工技術や積み石の施工技術など、極めて高度な技術を見ることができます。このため、境内の石積は県の重要文化財に指定されています。

境内の御殿下、青銅鳥居北側、本殿前などにも数多くの石垣が遺されていますが、俗に宮様御殿と呼ばれる宝物殿の周辺に築造されている石垣は10mもの高さを誇り、その規模とともに優れた建造技術が高く評価されています。また、石垣の上に建つ宮様御殿は、総門、唐門とともに、国の重要文化財に指定されています。

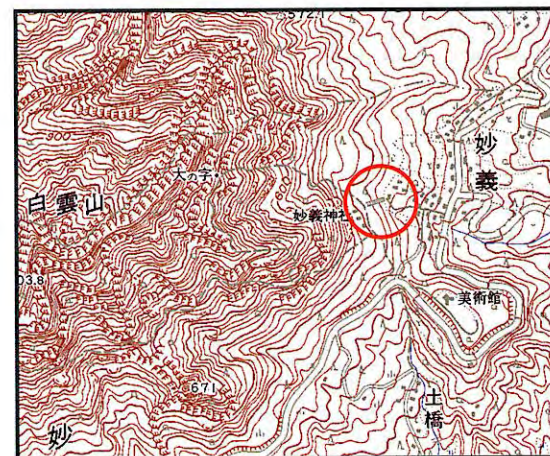
江戸時代の建築技術の粋を凝らした貴重な建物群。それを支えているのは丹精に組み上げられた石垣と妙義神社を愛する人々の心です。境内には、優美なしだれ桜が春を惜しむように咲き、庭園からは関東平野が一望できるほど見晴らしのよい景色が訪れる人々の心を和ませてくれる、そんな神社が妙義神社です。

概要

- 所在地 甘楽郡妙義町妙義（妙義神社境内）
- 年代 明和6年（1769）
- 構造形式 総門前の石積
- 管理者 妙義神社

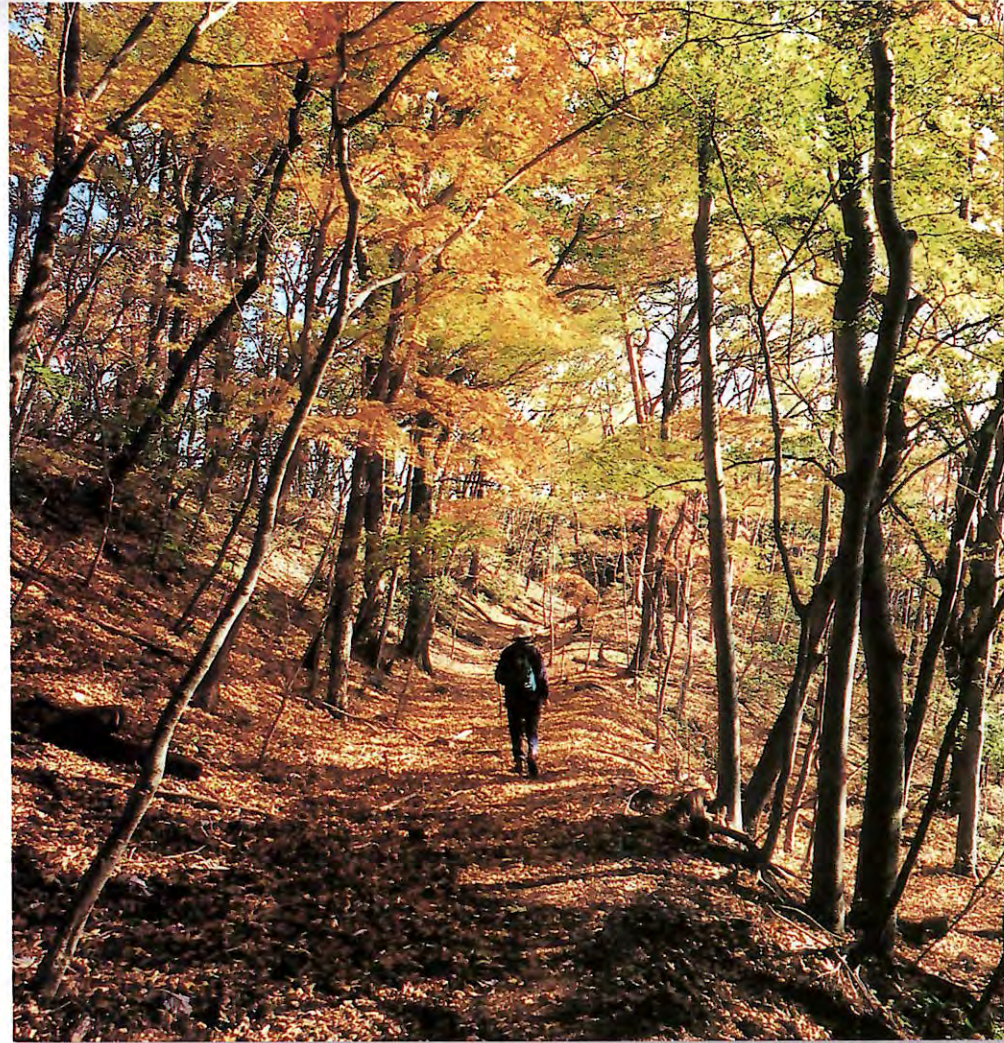


多くの信者が歩んだ石橋と石段



縮尺 1/25,000

碓氷峠の道 (旧中山道) うすいとうげのみち (きゅうなかせんどう)



旧中山道の途上、地元の人々から「碓氷の権現様」と崇められている熊野皇大神社

概要

- 所在地 碓氷郡松井田町坂本
- 路線名 町道0212 (旧中山道碓氷峠道)
- 年代 慶長6年 (1601)
- 管理者 松井田町



碓氷峠ルート図

関連DATA



入山峠から見る急峻な国道18号



日本の道百選・旧中山道入口



木々深い古道



碓氷峠剝石山・覗 (のぞき) から見る坂本宿

「宇須比」、「碓氷嶺」などの表示で日本書紀や万葉集に登場する碓氷峠には、江戸時代の五街道の一つ中山道が通っていました。中山道は江戸(日本橋)を起点として、武蔵(東京・埼玉)、上野(群馬)、信州(長野)、木曾(岐阜)を経て、近江草津で東海道と合流する幹線道路でした。東海道に53次の宿場があったように、中山道にも東海道の草津と大津を含めて69次の宿場がありました。しかし、東海道を旅する旅人にとって箱根・足柄の山が「天下の険」であったように、碓氷峠は「木曾のかけ橋、太田の渡し、碓氷峠がなくばよい」と詠われたように中山道三大難所の一つでした。特に、碓氷峠は勾配が急で、しかも季節によっては濃霧が発生したことから厳しい旅を余儀なくされたようです。中山道の最初の宿場である板橋宿(東京)から数えて17番目の宿場が坂本宿(松井田町)で、宿には本陣、脇本陣、旅籠、問屋など161軒の建物が軒を並べていました。

坂本宿から碓氷峠の頂上にある熊野神社に至る旧中山道は、現在ではハイキングコースとして整備され、愛好家の人気を集めています。コースは全長約8kmで、坂本宿から軽井沢が約4時間、軽井沢から坂本宿が約3時間程度を要するコースです。

旧中山道の面影を残すハイキングコースの細く森深い道を歩くと、当時の旅人の苦勞が肌で感じられるような気がします。最大の難所である剝石坂周辺には、十返舎一九の「たび人の身をこにはたくなんじよみち、石のうすいのとうげなりとて」と刻まれた上り地藏・下り地藏など、剝石(安山岩)の石造物が多数残されています。コース沿いには、昌泰2年(899)に関所が置かれていたとされる碓氷坂の関所跡や今も澄んだ水をたたえる弘法の井戸、堂峰番所など、数多くの見所が点在しています。

碓氷峠の頂上にある熊野神社の社殿は、江戸中期以降の建築物で、中央の本宮が群馬県と長野県の境に建造されており、右側の新宮は群馬県、左側の那智宮は長野県に建てられています。

古き時代より旅人を監視してきた中山道の関門

碓氷関所跡 うすいせきしよあと

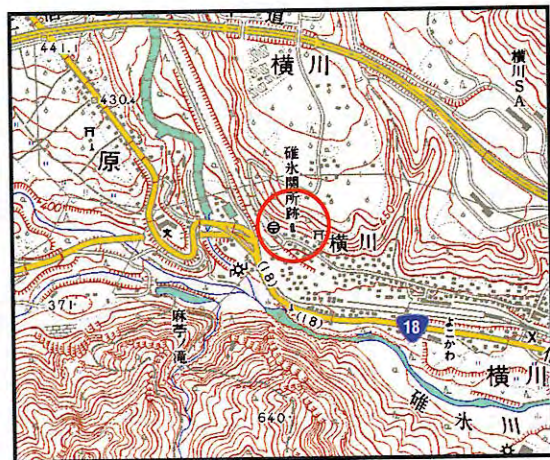
碓氷関所の門



歴史を感じさせる石段

概要

- 所在地 碓氷郡松井田町横川
- 年代 昌泰2年(899)
- 構造形式 木造瓦葺
- 管理者 松井田町



(縮尺 1/25,000)

関連DATA



江戸時代に描かれた坂本宿



坂本宿より碓氷峠・剱石山を望む



碓氷関所に入る大名行列



石に手をつき、手形を差し出した「おじき石」



碓氷峠の関所跡

中山道・碓氷峠は、日本書紀や万葉集などにもその地名が記される、東日本と西日本をつなぐ交通の要衝の地でした。そのため醍醐天皇の昌泰2年(899)には、古代東山道の警備のための関が設置されました。

江戸時代に入ると、中山道の警備のため元和2年(1616)碓氷関所(横川関所)が設置され、当時の安中藩が警備にあたっていました。

関所は霧積川の崖上に位置し、東門と西門のほかに番所、番頭居宅、同心長屋が建設され、明け六ツ(午前六時)から暮れ六ツ(午後六時)まで監視が行われていました。参勤交代制度が確立した寛永12年(1635)以後は、関所の任務も江戸への武器持ち込みや大名の妻子が国許へ逃げ帰るのを防ぐ、いわゆる「入り鉄砲と出女」が監視の中心任務となりました。その取調べの厳しさから箱根の関所と共に天下の二大関所と称された碓氷関所も、明治2年(1869)に廃止され、約1000年に及ぶ歴史を閉じました。

関所が廃止されて、20年後にはアプト式軌道による鉄道が峠を越え、さらに現代では長野新幹線や上信越自動車道などの高速交通網が整備され、徒歩や馬に揺られて越えた峠も、ほんの一瞬で通り過ぎる景色となりました。

かつて参勤交代や例幣使などの行列で賑わった坂本宿も、今は落ち着いた佇まいを見せています。また、JR横川駅から徒歩5分の関所跡には当時の門柱、門扉、屋根材、台石などを用いた東門が昭和34年(1959)に復元されています。

中山道 安中杉並木

なかせんどう あんなかすぎなみき



昔日の安中杉並木

慶長9年(1604)に江戸幕府が五街道を整備し、街道に一里塚や並木を設けました。安中杉並木もその一つで、中山道の宿場町・安中宿と原市宿の間約2kmにわたって植栽されました。江戸時代初期に始まった植林は、天保15年(1844)に732本を数えたものでしたが、昭和8年(1933)には約320本まで減少しました。上毛カルタに「中山道しのぶ安中杉並木」と読まれた杉並木も戦後自動車の排気ガスなどで次々と枯死し、バイパスの開通に伴う伐採などによって現在ではわずかに16本の巨木が残るのみとなりました。昭和8年(1933)に天然記念物に指定されています。



安藤広重が描いた中山道「安中」

概要

- 所在地 安中市原市
- 路線名 県道 下仁田・安中・倉淵線(旧中山道)
- 年代 天保15年頃(1844)
- 構造形式 杉並木
- 管理者 群馬県



(縮尺 1/25,000)

群馬の森

ぐんまのもり



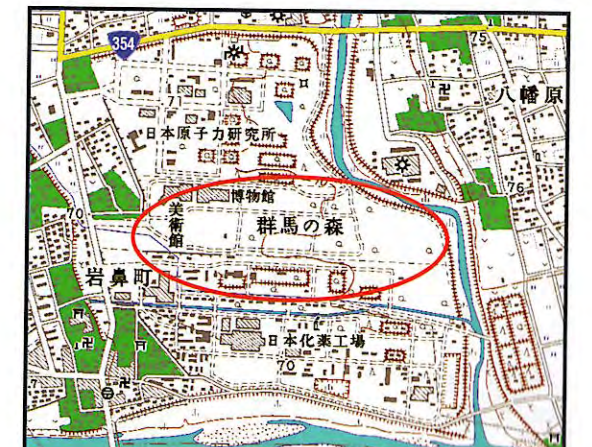
県の明治百年記念事業の一環として、昭和55年(1980)に完成したのが県立公園「群馬の森」です。「深い緑に囲まれたのびやかな緑の空間」をコンセプトに整備された公園は、可能な限り貴重な平地林を残し整備されました。井野川と粕川に囲まれた敷地26.2haの公園内には、群馬県立歴史博物館や群馬県立近代美術館とともに約4haの芝生広場、わんぱくの丘、あそびの広場などが整備されています。森と野鳥のさえずりに包まれた公園内に、子供たちの笑い声が絶えることはありません。

概要

- 所在地 高崎市岩鼻町
- 年代 昭和55年(1980)
- 構造形式 県立公園
- 主要諸元 面積26.2ha
- 管理者 群馬県



歴史博物館前、芝生の広場で伸びやかに遊ぶ子供達



(縮尺 1/25,000)

藤塚の一里塚

ふじづかのいちりづか



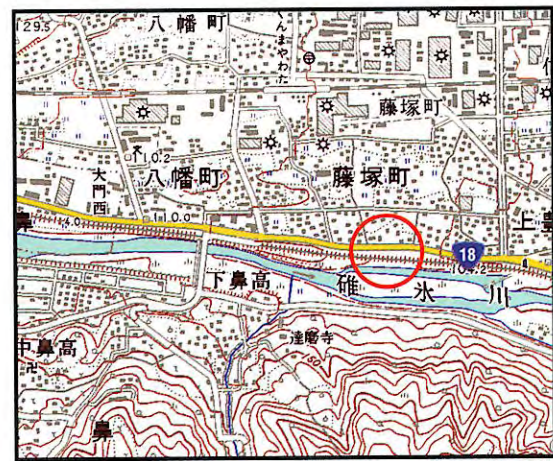
県内に唯一現存する藤塚の一里塚は、江戸日本橋を元標とする中山道28番目の塚で、日本橋から約112kmの位置にあります。交通の激しい国道18号の沿道にある塚は、江戸時代初期に植えられたと思われる榎とともに当時の原形をほぼ保っています。道を隔てて北側の一里塚は、道路拡張により現在の位置に移動していますが、中山道では唯一両側に塚が残るものとして、全国的にもたいへん貴重なものです。塚の周辺には、上豊岡の茶屋本陣や下豊岡の道標、少林山達磨寺などが点在し歴史の流れを感じさせます。昭和26年(1951)、群馬県指定史跡になりました。



国道18号を挟んで北側の一里塚。全国でも珍しい

概要

- 所在地 高崎市藤塚町
- 路線名 国道18号(旧中山道)
- 年代 慶長9年(1604)
- 主要諸元 江戸から28里(約112km)
- 管理者 国土交通省・高崎市ほか



(縮尺 1/25,000)

倉賀野の分かされ

くらがののわかされ



中山道の宿場町であり、日光例幣使街道との分岐点でもある倉賀野宿には、烏川に利根川の水運を支える倉賀野河岸がありました。碓氷峠を越えて運ばれてきた信州や越後からの米や塩は、倉賀野河岸から舟で烏川・利根川を経て遠く江戸へと運ばれて行きました。

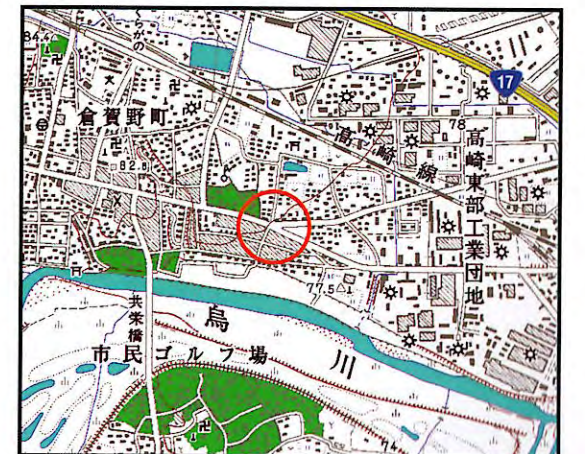
倉賀野宿は中山道の県内7宿の一つで、参勤交代の大名や日光東照宮への例幣使などの宿泊地として賑わっていました。「分かされ」は道の分岐点の意で、文化10年(1813)に建立された高さ1.6mの道しるべには、正面に左「日光道」、右「江戸道」と彫られ、道案内の常夜燈となっていました。また、近くには閻魔堂も残っています。



倉賀野宿の脇本陣跡

概要

- 所在地 高崎市倉賀野町
- 路線名 県道 和田多中・倉賀野線(旧中山道)
県道 線貫・倉賀野(停)線
(旧日光例幣使街道)
- 年代 正保4年(1647)
- 主要諸元 道しるべ 常夜燈
- 管理者 高崎市・倉賀野町下町



(縮尺 1/25,000)

例幣使街道と倉賀野常夜燈
中山道は、倉賀野宿東、下の水戸を止ると日光例幣使街道と分かれる。そこには、道しるべ、常夜燈、閻魔堂がある。道しるべには左日光道、右江戸道とある。ここから日光例幣使街道は始まる。日光例幣使街道は十三宿中、上州五宿(五村・五科・芝・木崎・太田)野州八宿となっている。正保四年(1647)に第一回の日光例幣使の派遣があった。以来、慶応三年(1867)の最後の例幣使派遣まで、二百二十一年間、上州の中心もなく継続された。また、この常夜燈は、県内では王者の風格をもっており、文化十年(1813)に建てられた。

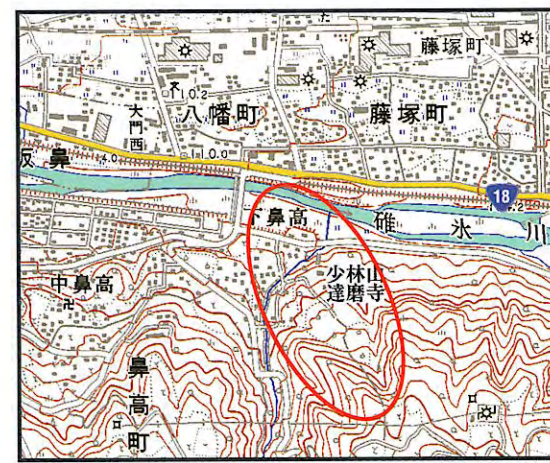
少林山地すべり しょうりんざんちすべり



第4期対策施工後の寺沢地区ブロック

概要

- 所在地 高崎市鼻高町
- 年代 昭和35年(1960)~平成11年(1999)
- 構造形式 鋼管杭工、地下水排除工(集水・横ボ
ーリング、排水トンネル、集水井工)
- 主要諸元 地すべり指定面積85ha
- 管理者 群馬県



(縮尺 1/25,000)

関連DATA



昭和35年6月/藤塚地区地すべり末端部旧国道18号<隆起前>



昭和36年7月/藤塚地区同上<隆起後>



昭和36年4月/寺沢地区内の亀裂(段差2mを超えた)



少林山達磨寺

毎年1月7日、県内外から福を求める多くの参拝客で賑わう少林山達磨寺周辺は、碓氷川に向かってなだらかな傾斜を有する丘陵地です。この丘陵地は巨大な地すべり地域で、古くから滑落や崩壊を繰り返しながら大きな土塊が滑動していました。

「少林山の地すべり」と呼ばれるこの地すべり区域には、達磨寺の境内、寺沢集落、碓氷川なども含まれ、面積約85haの大規模地すべりでした。地すべりの末端部は碓氷川を越えて対岸の国道18号にも達し、昭和35年(1960)には国道18号の路面が隆起するなどの被害を出しました。そのため、昭和35年(1960)地すべり等防止法に基づき「地すべり防止区域」に指定され、第1期から第5期に渡る地すべり対策事業が実施されることとなりました。

地すべりの滑動は、第1期から第3期(昭和35年~同54年)に渡る対策工事の実施に伴い、一時的に小康状態を確保しましたが、梅雨期の降雨の影響等により再び碓氷川の堤防が隆起し、また地すべり頭部での陥没・亀裂が発生しました。

その後、地すべりは第4期(昭和55年~平成7年)工事の実施により緩慢となりましたが、計画された安全性を確保するまでには至りませんでした。そこで、第5期工事(平成8年~同11年)を実施するとともに、その他の地区においても調査・対策工を実施し、ようやく少林山地すべり対策工事の完成をみることとなりました。対策工事に着手して以来、実に39年の永き歳月に渡る大事業でもありました。

今、地すべり対策として排土した跡地には、サクラやハナミズキ等が四季を通して咲き、展望デッキや四阿は周辺住民の憩いの場となっています。



達磨寺・だるま市